

Ⅲ 研究の実際

1 調査の方法 調査研究（無記名）

2 調査対象

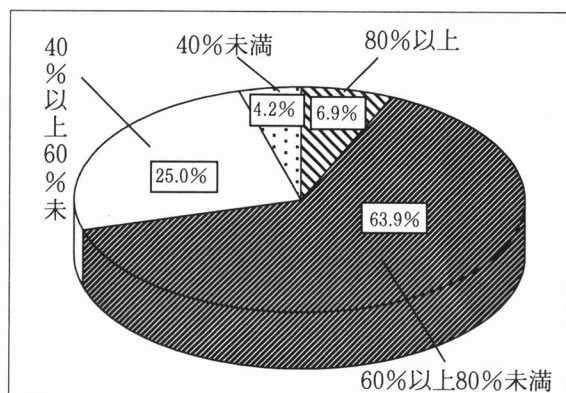
福島県教育センターにおける平成8年度の小学校経験者研修Ⅰ算数講座研修者（56名）、小学校経験者研修Ⅱ算数講座研修者（42名）、合計98名を対象とした。

3 調査結果と分析

(1) 「到達度調査研究」との関連から

① 算数の授業における児童の理解度

〈算数の授業における児童の理解度〉



この調査は、国立教育研究所^{注1}の調査と調査項目が同じものである。今回の調査を国研の調査結果(資料1)と比較すると、「80%以上理解」の段階が3.6ポイント、「60%以上80%未満の理解」の段階が20.3ポイント下回っている。

〈国立教育研究所による「算数の授業における児童の理解度」調査結果〉【資料1】

20%以上40%未満理解	40%以上60%未満理解	60%以上80%未満理解	80%以上理解
0%	5.3%	84.2%	10.5%

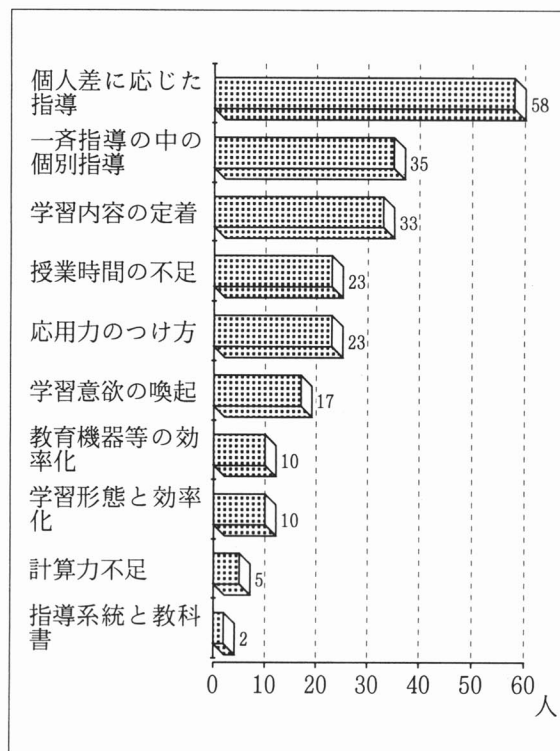
教師の目から見た「算数の授業における児童の理解度」の調査結果は、本県の算数成績分布が下位層に偏った分布状況と、同じような形態を示している。ここから、下位層を引き上げ、上位層をさらに伸ばしていく必要性を感じる。

注1 「特別研究『基礎学力』調査報告書」（国立教育研究所平成4年）P102より

② 算数の指導上の問題点

下のグラフは、「算数の指導上の問題点として考えていることは何ですか。」（複数選択可）という調査結果である。

〈算数の指導上の問題点〉



算数の指導上の問題点として、最も多いものが「個人差に応じた指導」であり、次いで「一斉指導の中の個別指導」となっている。このことから、一人一人に目を向けた指導について、大勢の教師が、どのように対応していったらよいかという課題意識を持ち、解決策を求めていることが分かる。

そこで、個人差に応じた指導をどのようにしているかについて、さらに調査した結果（資料2）、次のことが明らかになった。

ア 遅れがちな児童への対応

- 遅れがちな児童に対しては、授業中に対応していこうとする姿勢が多く見られる。
- 特別な課題を与えたり、保護者への協力